

〔新入社員の声〕

豚の飼養管理を経験して

飛田 雄輝

(伊藤忠飼料株式会社 〒136-8511 東京都江東区亀戸2丁目35番13号新永ビル)

All about SWINE 54, 30

2018年の春、無事に獣医師免許を取得して大学を卒業することができた。卒業後伊藤忠飼料(株)に入社し、6週間ほど養豚農場で研修させていただいた。それが、私にとって産業動物の飼養管理をする初めての機会だった。大学では実習で家畜に触れることはあっても飼養管理はしていなかった。そもそも豚に関しては私の母校で飼われておらず、在学6年で生きた豚に触れたのは1回の実習のみであったと記憶している。初めての経験に胸躍らせて始まった研修は、おろおろしっぱなしで豚達に振り回され続け、全身筋肉痛のうちに幕を閉じた。ただ、豚を飼養することの大変さだけは学んで帰ってきたつもりである。以下、初めての豚管理で感じたことについて書いていきたい。

まず、豚舎内で糞の掃除などの作業を行っているときに豚がやたら噛みついてくる。離乳豚が噛んでくる分にはかわいいものだしむしろ癒されるくらいだが、それが肥育豚となると作業もしにくいし何より痛い。その様子から豚は物怖じしない動物なのかと思えばそうでもない。出荷や豚房を移動させるときなどに、怖がってしまうとまったく動かなくなる。そうなると力いっぱい押しもなかなか動かず、豚との根競べになる。好奇心旺盛な部分もあるけれど、臆病な一面もある。そし

て大抵臆病であってほしいときに好奇心旺盛に、好奇心旺盛であってほしいときに臆病になる。豚に対してそんな印象を持った。

また、飼養管理以外の業務に多くの時間がかかることに驚いた。空舎後の豚舎を一部屋水洗するのに丸二日かかる。高圧洗浄機のガンを抱えてずぶ濡れになりながらひたすら洗い続ける。水洗がここまでの大仕事なのは予想外であった。

私はひいひい言いながらなんとか研修を乗り切り、予防衛生と名付けられた部署に配属となった。疾病予防の為に衛生管理が重要と言われていた。学生時代の私は要するにきれいにすればいいだろうと軽く考えていたが、実際に農場を体験した今はそれがどれだけ難しいことであるか分かる。豚の管理をする従業員の数には限りがあるし、設備的、金銭的な限界もある。農場研修がなければ、このような基本的なことも分からないまま働きだしていたかもしれない。疾病や病原体の知識があることは大前提で、農場の現状を把握して可能な策の中で効果的な疾病対策を考えていくことが産業動物の獣医師の仕事なのだと思う。そのような獣医師を目指して、これから精進していきたい。